

武蔵野日曜集会 降誕節

受肉のキリスト

――ヨハネ伝第1章1～18節――

1986年12月21日

小池辰雄

第一のアダム 無相の相 善悪を超えた世界 天地融合 在りて在らしむるもの 言行一如
無始の始 生命をもって生命を助ける 神に直結 第二のアダムと同じ姿になれ つらつら視
て手触りし所のもの

【ヨハネ1:1～18】

1 太初に言あり、言は神と偕にあり、言は神なりき。2 この言は太初に神ととも
にあり、3 万の物これに由りて成り、成りたる物に一つとして之によら
で成りたるはなし。4 之に生命あり、この生命は人の光なりき。5 光は暗黒に
照る、而して暗黒は之を悟らざりき。6 神より遣された人いれたり、その名を
ヨハネという。7 この人は証のために来り、光に就きて証をなし、また凡
ての人の彼によりて信ぜん為なり。8 彼は光にあらず、光に就きて証せん為に
来れるなり。

9 もろもろの人をてらす真の光ありて、世にきたれり。10 彼は世にあり、
世は彼に由りて成りたるに、世は彼を知らざりき。11 かれは己の国にきたり
しに、己の民は之を受けざりき。12 されど之を受けし者、即ちその名を信ぜ
し者には、神の子となる権をあたえ給えり。13 斯る人は血脈によらず、肉の
欲によらず、人の欲によらず、ただ神によりて生まれしなり。14 言は肉体と
なりて我らの中に宿りたまえり、我らその栄光を見たり、実に父の独子の栄
光にして恩恵と真理とにて満てり。15 ヨハネ彼につきて証をなし、呼ばわり
て言う『わが後にきたる者は我に勝れり、我より前にありし故なり』と、我
がかつていえるは此の人なり』16 我らは皆その充ち満ちたる中より受けて、
恩恵に恩恵を加えらる。17 律法はモーセによりて与えられ、恩恵と真理とは
イエス・キリストによりて来れるなり。18 未だ神を見し者なし、ただ父の
懷裡にいます独子の神のみ之を顕し給えり。

● 第一のアダム

クリスマスおめでとうございます。クリスマスは、私は1940年から集会を始めて今



年で40何回迎えているわけで、どこを話したって、もうかつてお話をしたところですよ。まあしかし、前に何をしゃべったか、私は忘れっぽいからちよいどいいので、また今日も全く新しい気持ちでお話をします。

「キリストとは何だ？」

と言われたときに、このヨハネ伝1章1節から18節が最高の答案だと思います。これは大変な言葉です。このたった18節を何時間語っても、尽きない内容を、無量の内容を持っています。まあ大変なものです、ヨハネ伝というのは特に。

キリストは、パウロが「第二のアダム」と言いました。コリント書簡に出てます。まず、「第一のアダム」からお話を持っていかなければならないと思うので、創世記をちよつと開いてみましょう。

実は『一日千年』（後に小池辰雄著作集第十巻『聖書は大ドラマである』に改題、1988年刊）で私は創世記のところを全部書いてしまつたんですが、全部といつても、中から選んだ句ですけれども。要するにこの一年間で全聖書を通読しながらやるわけです。私は呑気なようでものすごく忙しい。忙しいという言葉は当たらない。毎日が本当に充実そのものです。1章の1節から創世記はずつと天地の創造を書いています。天体の創造から地球上の植物、動物、爬虫類から鳥類に至るまで。最後にひとつ残っていた。人間の創造ということが人の創造のところが1章27節に、

「²⁷神はその像の如く人を創造たまへり。」

とある。「像の如く」ではなくて、「像に即して」ということ。ヘブライ語の「ヴェ」という字ですが、「即」です。よく「似姿」という言い方をしますが、あの言い方ではなお足りない。

「²⁷神はその像に即して、人を創造したまへり。即ち神の像に即して、之を創造、之を男と女に創造たまへり。」（創世記1・27）

「創造」「バーラー」という言葉が三回使つてある。

人間はもともと、第一のアダムは——アダムとイブ——これは神に即して造られた。神さまはどんな形をしているかという、神さまは形はない。神さまは形がないから、無相なんです。相が無い。無相の相、相無き相という。神の相なき相に即して人間は造られたということ、人間の本质は神性であるということです。

本来、人間は神相、神性を持つてゐる。学校の教育は、本当はそういうところから始めなくてはいけない。霊止、霊が止まつてゐる、神霊がその中に止まつてゐるのを霊止という。受霊という。神さまから霊を受ける受霊、これはもう古事記や何かに出てくる言葉です。古事記はいつぱい読まないといかんですよ。



●無相の相

無相の相ということ。人間の本质は神性である。仏教でいえば、

「衆生 悉く仏性あり」

という。仏性を持つている。要するに絶対的な宇宙の大霊の相をそなえている。プロテスタントでは、「罪びと」と言つて、「罪」のことばかり言つていゝものだから、この一番もとのことを忘れてしまつていゝ。キリストは、

「お前たちは神々だ」

とまで言われたでしょ。「お前たちは神さまの子だ」といゝのをキリストはもつとはつきり、

「お前たちは神々だと書いてあるではないか。何を言つていゝか」

と。面白いね、このキリストは。

本来、神に即して造られていゝ。だから、思ふことはそのままやつてよかつた。神さまと一つだからね。それは一如になつていゝ。楽園、パラダイスではもう本当にアダムもエバも――善も悪もない、善悪を超越した世界――それは本当の美の世界です。

カントの哲学をみても、最後の『判断力批判』のところでは、美は純粹理性と実践理性を調和した世界です。日本人は本当はそういうことはサツと分かる民族なんです。非常に芸術的な民ですからね、本来。善だの悪だのと言つていゝ世界ではない。

「わが思ふところ矩を踰えず」

（七十にして心の欲するところに従つて矩を踰えず）

なんて、孔子はやつと七十になつて悟つた。その境地に入つた。キリストはもう初めつから、思ふところ法を越えなかつた。ケタがちがうですよ、「世界の三聖」なんて言つたつてね。昔、「ソクラテス、孔子、キリスト」を「世界の三聖」なんて言われた。お釈迦さんも入れたら「四聖」か。けれども、お釈迦さんだいたい修行してからあとで悟つたんですよ。キリストは初めつからです。十二歳のキリストに坊さんたちがかなわなかつたんだから。

完全にイエスというひとは神に即していゝ。自分がない。私は、

「キリストは私のない無私のひと、無者だ」

と言つていゝ。世界中に誰もキリストのことを「無者」と言う人がいゝないんだ。私は『無の神学』（小池辰雄著作集第三巻、1982年刊）を書いた。しかし、それはみんなに除け者にされた。

自分が何もなくて、だから、神さまが顕れたんですよ。それは神さまを現象した。無色透明の光を受けとつていゝから、このバラはこのように赤になつたり白になつたりして表わしていゝ。赤も白もとは無色なんです。太陽の光は無限の色を持つていゝ。虹がそうでしょ。根底は全部この無の世界なんです。無といゝのは、無いという字ですが、無限のこと、無即無限無量の世界です。これもNHKラジオでいっぺんやつたけれどもね（「私の信ずる無者キリスト」1982年10月31日放送）。



●善悪を超えた世界

最初のアダムもエバも神に即したがたであつた。けれども、神さまは、

「お前は善悪を知るの樹だけは食べてはいかん」

と。創世記2章に書いてある。あの神話は面白いですよ。

「善悪を知るの樹を食べたら、善悪を超えた世界から落ちてしまうぞ」

ということになる。「善だの悪だの」と言っているのは、ダメになっているから「善だの悪だの」と言う。これはあの老子がそうなんです。

「大道^{すた}廃れて仁義あり」

という。エライね、この老子という人は。

「本当の天下の大道が廃れたら、仁だとか義だとか言い出した」

と。すごいね。仁とか義とかいうのは、愛と義ですから、非常に大事なことだ。これは道徳の世界の根底なんだ。けれども、仁義よりももうひとつ上の世界は大道無道の世界だと。無道の道なんだ、この老子というのは。だから、孔子が驚いた。

「老子というのはちよつとケタがちがつて、天に昇ってしまうような龍のようだ」

なんてなことを言つたという話です。私は『無の神学』にキリストと老子のことを書いたでしょ。

仁義だの善悪だのを超越した、仁義善悪の彼岸の世界がパラダイスだ。そのパラダイスで生きているのが幼児^{おさなご}なんです。幼児は善悪なんて考えていやしない。笑つたり食べたり、すべてが本当にいい意味において本能的だ。動物がそうです。動物よりか悪くて人間はダメなんだ。獅子はお腹がすくと、一つの相手をねらつて、追いかけて食べてしまう。あとにはどんなにいたつて、食いつきはしない。即ち、欲がない。それは本能でいい。それが善悪の彼岸なんだ。ところが、人間ばかりが善だの悪だのとゴタゴタゴタゴタやつている。動物と幼児はちよつと似ている。だから、

「幼児^{おさなご}の如くならずば天国に入れない」

ということは、

「善悪を超越した世界に來なければダメだよ」

と、キリストは言われる。普通の教育でこんなことを言うと、みんなびつくりしてしまう。仕方がないものだから、善だの悪だの、「すべき」だの「すべからず」だの、「勉強せよ」だの、どうだのこうだのとやつている。勉強することが自然であつて、

「そんなことを言われなくても大丈夫ですよ」

という世界になれば、その子どもは本ものだ。すべてが遊びになる。楽しい。カントが義務の世界を言つたら、シラーがもうひとつ上の世界を言つた。

「人間が本当に人間であるときは遊びである」

というようなことを言つた。これも私は「ルッターとシラー」というところに書いた。



だから、

「毎日の生活がパラダイスみたいだ」

と、これは本もののなんですよ。どんなに辛いことでも、微笑みながらできるようになる。本当はそうだった。ところが、

「善悪の知るの樹を食べたらば、お前はダメになるぞ」

ということだ、あの神話は。いまだかつてそういう解説の仕方をした人がいるかいらないか知りませんよ、私は。

それで、サタンの使いの蛇に誘われて食べたら、おかしくなった。「食べた」というのは神さまの言うことをきかなかった。神さまの言うことに「はい」と言って、そのまま受けとっていたればよかった。

「ノー リーズン ホワイ、バット ツー ドゥー」

(何と理由を言うことはない、仰ったことは、はいと行う)

なんだ。

「はい」というと、私は思い出す。私の兄貴はこの信仰に入ってから素晴らしくなってお母さんの言うことは全部、「はい」と言って聞いて、それを実行していました。決して口答えしなかった。終りの五、六年は素晴らしかった。私は、兄貴はいつまでたっても兄貴です、私が何歳になろうが。

善悪を知るの樹を食べたということは、神さまの言いつけに従わなかった。神に即しているすがたであるのが即さなくなつた。そうしたら、パラダイス・ロスト、樂園喪失。それでゴタゴタゴタゴタやっている。この樂園喪失をもういっぺん引っくり返して、パラダイス・リゲインドを、樂園回復をするためにキリストがいらっしゃった。だから、キリストを受けとらなければ、本当のパラダイス的な生き方はできないんです。単なる教育ではダメです。

天野先生の文集が昨日できた。そう言つてはわるいけれども、天野先生はそこまで行つてなかったものだから、正直言つたよ、私に、

「小池君みたいな信仰を、実は私は持ちたいんだ」

と。天野先生は立派に生きられた方です、正直。私はなにも先生にけちつけるわけではない。けれども、福音の世界からはちよつと次元がちがう。

そういう樂園回復のためにキリストはやって来られたんだ、今日。「今日」と言つたって、12月25日ではない。あれは大体、春なんだ。早春です。

●天地融合

面白いね、あの神話は。人間は、どういうことで造つたかという、第2章7節に書いてある。



「⁷エホバ神 土の塵を以て人を造り、^{いのちのいき}生氣をその鼻に吹き入れたまえり。人
即ち^{いけるもの}生靈となりぬ。」(創世記2:7)

土でこねて、塑像みたいに人間を造って、そして息を吹き入れたら、

「ネフェシユ・ハッヤー」「生命の魂」^{いけるもの}「生靈」

となったと。即ち、神の息は^{いけるもの}天氣、神氣だ。土は地的な材料でしょ。だから、天地で人間はできている。人間そのものは天地的存在だ。肉体は地的なもので、魂は天的なもの。天地融合しているんだから、分析したらダメなんだ。救いとは、天地融合の世界にまた入れられることが救いなんです。魂だけのはなしではない。

神の相に^{すがた}即した、しかもそのすがたというのは天地融合の相であつたという。天地融合を本当にやりに来たのがキリストで、これが「受肉」なんです。靈なるキリストは肉を取ることに^{すがた}なった。天界の靈的な存在が、

「アブラハムより我は先にありしなり」

という、天界で靈的に生きていた人が地界に現われてきた。マリアを通して。あのグレコの「受胎告知」という絵がある。聖靈によつてマリアが身ごもつたという。そのことを天使が知らせに来た。

だから、第二のアダム(キリスト)がやつて来た。

「罪は第一のアダムでやつて来て、^{いのちのいき}本当の生命は第二のアダムでやつて来た」

とパウロが言っているとおりで。せっかく神に即したのがダメになつてしまつたから、回復しなければならぬ。その回復の道は、仏教だとか何とかいろいろありますよ、その道は。仏教にもいろいろあるわ。いろいろあつても、結局は最後は同じ次元に入つていかなければダメなんです。仏教の人に、私は

「お前はキリスト教になれ」

なんて絶対に言わない。

「結構です、どうぞその世界で本ものになつてください」

と言う。

このバラはチューリップに、

「お前は私と同じようにバラになりなさい」

なんて、そうじゃない。チューリップはチューリップらしく、バラはバラらしく、百花繚乱という。それぞれの在り方をそれぞれが本ものになつていけばいい。太陽の光を受けなければ本ものにならない。神さまの光を受けなければ本ものにならない。

●在りて在らしむるもの

今、私は出エジプト記を書いているけれども、モーセがホレブの山で神さまにでつくわして、柴が燃えているけれども、燃え尽きない。靈火の中から、



「モーセよ、モーセよ。私はアブラハム、イサク、ヤコブの神である。イスラエルの民はエジプトで今苦しんでいるが、これを助けてやろうと思うから、お前が行け」

「いえ、とてもできません」

「私がお前と一緒にいるから」

「それでは」

と。「はい」と言つて、モーセは出かけて言つた。

「みんながあなたの名前を聞いたなら、何と答えたらいいですか」

「私は在りて在るものだぞ」

と。みんなそう訳している、世界中で。ところが、私はそう訳さない。というのは、あるとき夏の夕に太陽の光がサーツと射ってきて、

「ああ、地球は太陽の光で在らしめられているなあ」

と。ちょうどニュートンがリングが落ちて地球の引力を知つたように、太陽の引力を――分かりきつたはなしだけれども――本当にその時に感じた。地球は太陽に引っ張り回されている。太陽がいなくなつたら、地球は全然ダメなんだ。地球の存在は太陽に完全に依存している。太陽が在ることが地球を在らしめている。そこで、パツと来たんです。ああ、モーセに言われた神さまの言葉は、

「私は在りて在らしむるものなり」

と訳すのが本当だと。文法的にはそう訳せませんよ。

「私は在りて在るもの」

あるいは、

「私は在りというものである」

というように訳すかのどちらかなんです。けれども、その本義は、奥義は、ミステリオンは、

「我が在るということでお前は在るんだぞ」

ということぞ、

「私は在りて在らしむるものだぞ」

と。世界中でそう訳しているのは一人もいない。

「神が在るというのは、他に対して在るんだ」

というような註解をする人はあるけれども。あんな註解を見る前に私ははつきり、もう今から何十年前かな、そのことに気がついたんだよな。あの時に論文を書けばよかった。

「在りて在らしむるもの」

です。地球は無に等しい。リングと同じなんです。太陽の方へ、太陽に引っ張り回されている。地球上の我々もみんな太陽に絶対に依存している。自然的人間は、太陽に絶対に依存している。どんなこと言つたつてダメですよ、太陽に依存しているんだ。だから、お天



道さんを拝んだっていいよ。神さまでなければお天道さんを拝んだらよからう。自然的存在は、人間は絶対に太陽に依存している。その光熱に。

人間も無じゃないですか。何もありません、本当は。無者なんだ。自然的にも我々は無者なんだ。今度は、神さまに完全に依存している。信する信じないにかかわらず。だから、「自分は何ものでもない」ということを本当に知ったら、もの凄いことになる。そんな小さな自分なんてものをいくら考えたってダメだよ。

これがみんな理解できないらしい。理解といたって、頭でないから。全存在だから。全世界の神学者を相手に私は戦うことができる。これは聖霊の世界だから。だから、

「私は必ず大きな詩を書いて世界に訴えてやるぞ」

と言っている。この著作集は十巻で再来年の辰年で終る。そして、必ずでっかい詩をひとつ、辰年から次の辰年まで12年かけてやつつけます。そしたらサヨナラするから。

無の味はどんなご馳走もかなわない。それだから私は楽でしょうがない。楽で力が来てしょうがない。病気がとつかないですよ、正直。だから、私は皆さんに

「集会に来なさいよ」

と言っている。日曜毎に一緒にその力をいただきながら進もうではないかと。京都や大阪や岡山なんかは、

「先生の録音を聞きたくてもしょうがない」

と待ち受けているんだ、みんな。何か仕事をしながらでも聞いている。ということは、本当に私たちは一つで、いいよ——これでいいなんていう世界はないですから——限りなく進んでいきます。「ファウステツシエル・ドラング」「ファウスト的追求」という。そういうことでキリストはやって来た。そのキリストが無者キリストです。

●言行一如

では、ヨハネ伝1章1節から。

「太初に言あり、言は神と偕にあり、言は神なりき。」

これは大変な言葉だね。「言」という字は昔の聖書には、

「太初に道あり」

と書いてあった。そのもうひとつ前は、

「太初に霊言づいてる」

と書いてあった。「霊言」、「道」、それから近頃は「言」と訳す。「言」といったって、いわゆる言葉ではないです、この「ロゴス」という字は。これはギリシア哲学からきて、ヨハネはそれを借用したわけだけれども。

神さまの言は行いと全く一つですから。言行一如の世界です。

「いわゆる言ばかりではダメだ」



と言って、ゲーテは『ファウスト』の中で、ファウストを通して、

「今のキリスト教は理屈ばかり言っている。初めに理屈の言ではないぞ。行為しなければダメではないか」

と。そこで、あのファウストを通して、

「初めに行為ありき」

と訳しておさまた。さすがにゲーテだね。言葉の魔術師みたいなあのゲーテが――文学の最高ですよ、世界的な文学者の一人ですから――それが

「初めに行為あり」

と言った。私は『ファウスト』を読んで、毎回私は驚嘆しているんだ。とにかくゲーテというやつは凄いやつだなと。

「行為が一切である」

という言葉も第二部の中に出てくる。プロテスタントは

「信仰のみ」

とやっている。それがまた観念信仰にズレてしまった。

「信仰だけではダメだ、行為も必要だ」

と言って両方やっているのがカトリックだ。

両方ではない。信行一如。信即行、行即信なんです。この即の字が大事です。即如の世界。分裂のない世界が本もののなんです。それがどんなに破れていたっていいよ。とにかく、分裂のないということが大事なわけです。口に出ては言となり、手足に出ては行となる。言行一如です。

「言は易く行は難し」

なんてことをいつまでも言っているからダメなんだ。二段構えで言っているから。私はマルコ伝をやってから、この頃本当に即的な人間になってしまった。何かあるとすぐ電話をかけてしまう。長距離も短距離もありやしない。

●無始の始

「初めに言あり」

というのは、キリストという方は即ち神さまの表現体のもとなんです。「ロゴス」というのは訳しようがない。

「初めにロゴスあり」

で本当はいい。「ロゴス」にはたくさん意味がありますから。「ロゴス」は「神の理念的な存在」とでも言っておくかね。理念的存在があったと。

²この言は太初に神とともにあり、

それは神と共にあった。「共に」というのは、「相對して」ということ。そして、その理念



的存在は神性であった。「神なりき」というのは、神の性を持っていた、神性を持っていたということ。

「言は神なりき」

というのはそういうことです。ギリシア語では「神」という字が先に出ている。あれは主語ではない。同質なんです、言うまでもなく。けれども、天界に居たのではしょうがないから。

「太初」^{はじめ}

というのは、天地創造の初めではない。無始の始という、始めなき始めということ。天地創造は神さまの行為として始まったんでしょ。

「太初に天地を造りたまえり」^{はじめ}

と。天地を造る前は、始めも何もない。無始無終の永遠の世界です。永遠の世界から神さまが創造したというところから時間が始まったんだ。そこから時間と空間が始まった。キリストはそれ以前だ、この「はじめ」というやつは。

「無始の始において在った」

ということだ、もう少し厳密に言うと。始め無き始め。分からないんだ、有限にして無限なるこの宇宙というやつは。宇宙は有限にして無限、無限にして有限なんだ。果てし無きもの。この認識の世界では、「果てし無い」ということは本当はありえない。

「始め無き始めに神さまと共に在って、これは神性であった」

と。それだけでは困ってしまった。けれども、今度は人間を本当に救うために顕れてこられた。

「^{よろず}万の物これに由りて成り、成りたる物に一つとして之によらで成りたるはなし。」

一切の創造はこの神・キリストによつて成った。創造の業は、神さまとキリストが一緒にやったと。そして、

「^{いのち}之に生命あり、この生命は人の光なりき。」

これに生命がある。この言という、ロゴスというものに生命があつた。この生命は人の光です。

⁵ 光は暗黒に照る、而して暗黒は之を悟らざりき。⁶ 神より遣された人いでたり、その名をヨハネという。⁷ この人は証のために来れり、光に就きて証をなし、また凡ての人の彼によりて信ぜん為なり。⁸ 彼は光にあらず、光に就きて証せん為に來れるなり。

⁹ もろもろの人をてらす真の光ありて、世にきたれり。

キリストは、「私は葡萄の樹みたいだ」なんて仰つしやらない。

「我は真の葡萄の樹」^{まじし}



と言われたでしょ。

「本当の葡萄の樹よりかもつと本当だぞ」

と言うんです、キリストは。この太陽の光は光だ。ウソじゃない。けれども、このキリストという光は太陽の光以上の光だということです。しかも、このキリストは我々に対して

「汝らは世の光なり」

と言われたじゃないですか。だから、今日私は雅号に「天光」と書いた。みんな意味があるんだよ。勝手に書いているんじゃない。なにしろ私の号には全部、「天」が付きますから。真の光は天の光。天来の光です。神さまの恵みはただ外側から照らすためにきているのではない。内側に浸透するためにやってきた。だから、

「お前たちは世の光だ。発光体になれ」

というわけだ。蓄電池ではなくて、発光体になれと。

「私の光をしょつちゅう受けとつていれば、お前自身が発光体であるぞ」

というわけだ。蓄電池の光ではダメだと。キリストに帰入（祈入）する。自分を投げ入れる。何でも、一つにならなければダメなんです。

●生命をもって生命を助ける

10 彼は世にあり、世は彼に由りて成りたるに、世は彼を知らざりき。11 かれは己の国^{おのれ}にきたりしに、己の民は之を受けざりき。

これはその通り。ユダヤ人はこれを受けないんだ。受けとらない。それはユダヤ人の信仰には立派な素晴らしいものもあります。けれども、なぜキリストを受けとらないか。そこだけはどう考えてもダメだな。ユダヤ人の最大のチャンピオンじゃないですか。そのユダヤの歴史が、イスラエルの歴史が最後に生み出したものはキリストじゃないですか。そのキリストをなぜ排斥するか。十字架にかけたか。

今は、いわゆる「原始福音」（マクヤ）の人たちがユダヤ人と、一生懸命になつてイスラエルへ行つて、やっているさ。その気持は分かるよ。けれども、

「あなた方は、なぜ、キリストを受けとらないか？」

と、誰もそういう質問はしないらしいね。そうすると、おかしいことになるから。

「あれは預言者くらいだ」

なんて言うかもしれない。何も、宗教の世界は喧嘩する必要はない。

「ああ、そうですか。あなた方はそう思うなら、それも結構です。まあそれでやっていってください」

ということだ。私はそれではいけないというだけのはなしだ。宗教戦争くらい馬鹿らしいことはないですから。また、宗教の言葉に反することはない。みんなそれぞれで結構です。しかし、



「それでいいですか。まあよければ、それでやってください」

と。本当は、日本人にはね、キリスト教は性格的に合わないんだ、砂漠の宗教だから。
「生贄」^{いけにえ}だなんて。アブラハムはイサクを人身御供^{ひとみごころ}にしようとした。

「お前はイサクを献げろ」

なんて。アブラハムは黙って従った。与えられたたった独り子をも献げようとした、その信仰をよしとして、

「アブラハムよ、アブラハムよ、それを殺すな」

と。ところが、神さまは最後にキリストを殺してしまった。犠牲にしてしまった。十字架にかけて。これは我々の罪の贖いのためというわけです。

日本人には、大慈大悲の方があうんだよ。

「ああ、よし、よし。もうみんな赦してやる。無条件に赦してやる」

「ありがとうございます」

と。仏教の方はそっちの方だ。キリストの方は、我々の自我という罪をどうしても裁いてしまわなければならなかった。

「キリストにおいて我々の自我が裁かれている。その罪を全部、キリストは背負った。それで我々は無罪にされた」

というのが、これが福音の信仰だからね。普通の人はこれを受けとらないんだ。気持はわかるよ。けれども、それですまないんだ、どうしても。

たとえばですよ、ある友人が、私のために生命を捨てたとする。

「あの人がいたので私は助かったんだ」

という、その命懸けの友情というものは、これは許すも許さないも、もつと深刻な世界です。言葉で許す世界ではないんです、これは。言葉で助ける世界ではない。生命をもつて生命を助ける。

だから、キリストはその後で必ず甦った。

「永遠の生命はかくのごときものである」

ということを実証した。十字架で終つてない。「マタイ受難曲」とか、「ヨハネ受難曲」とかあるが、なぜ、受難曲から復活曲を作らないのかね。聖霊曲だとか。そこが彼らの信仰のなんだかちよつとまだもの足りないところだ。だから、

「キリストの直弟子の、特にそのチャンピオンであるパウロに帰れ」

と、私は言っているんですよ。なにしろ、パウロというのはすごいやつだ。キリストを除いてはもうパウロにかなうやつはいない。ユダヤ教の権化だったのが引っくり返ったのだからね。今のユダヤ人も引っくり返ったらしいのに、引っくり返らないんだ。

「パウロはまちがった」

だなんて、何を間違ったか。



皆さん、本当にもうキリストは大変なひとですからね。

「七度を七十倍にしても許せ」

と言っているでしょ。無条件に許せと。キリストは無条件に許したから。十字架上の片一方の盗賊は、

「どうも、私たちはさんざん悪いことをしたから、十字架にかけられても仕方がありません。せめても、覚えてください」

と言ったら、キリストは、

「お前は、今日、私と一緒にパラダイスだ」

と言われた。我々は毎日、キリストと一緒にパラダイスでなければダメなんです。善悪の彼岸にいたくは。

●神に直結

¹²されど之を受けし者、即ちその名を信ぜし者には、神の子となる権をあたえ給えり。

キリストの名を信ずる。キリストにおいては、名は実名なんです。実名を信ずるとは、身受^{しんじゅ}、身体^{からだ}で受けとる。我々の信仰の世界は単なる心の世界ではないですよ。全存在的、身体という言い方で言いたい。これを受けとる。だから、

「御名に在りて」

と言うときには、本当にその中にいなければ、「御名に在りて」という言い方は空言になる。祈りの世界で、祈ったあとで、

「キリストの御名にあつて」

とか「御名によつて」とか言う。あの言葉が一番力強いんです、本当は。

「私の祈ったことは間違っているかもしれませんが、どうぞ、神さま、御名に在つて受けとってください」

ということ。キリストは執り成しの霊でもあるからね。

¹³斯^かる人は血脈^{ちすじ}によらず、肉の欲^{ねが}によらず、人の欲によらず、ただ神によりて生まれしなり。

その通り。お父さんが信仰があるから息子は信仰があるというわけにはいかない。一人びとりは神に直結する世界ですから。普通は、血がつながっているから、親父さんの耳にまた子の耳が似たり、性格的に似たりするけれども。信仰の世界は、似るも似ないもない。みんな一人びとりが直結するんです。

「各時代は神に直結する」

とランケが言ったが、各人は誰でもが神に直結しなければダメだ。「神―キリスト―我」という、この縦の関係です。間に坊さんや何も要らんですよ。だから、そこはプロテスタン



トなんだよな。ローマ法王なんてものは要らないんだ、本当は。なにもローマ法王にケチをつけるのではない。カトリックはカトリックの組織で結構でございます。人間はそれぞれ、の在り方があるから、悪口は言いたくない。けれども、ただどんな在り方をしていても、「そこに本ものがあるか」

ということだけが問題です。組織があつたつていい。けれども、組織を生かしているものがあるかということが問題。組織がないのがいいのではない。組織がないけれども、「そこに本ものがあるか」ということが問題なんだ。

「無教会」なんてのはへたすると個人主義になつてしまつて、本当のエクレシアがない。本当の伝統というのは伝統に固執することではない。無教会は伝統を乗り越えた創造的なことをやっていくことが大事だ。私は自分の主観でものを言っているのではない。御霊の権威でものを言っていますから。

14言は肉体となりて我らの中に宿りたまえり、我らその栄光を見たり、実に

父の独子の栄光にして恩恵と真理とにて満てり。

この「宿る」という字は「幕屋を張った」という字です。我々の中に幕屋を張った。このヨハネ伝1章14節は聖書の中の最大の言葉の一つです。

「幕屋」は創世記から黙示録まである。だから、私は「幕屋」と言い出した。そうしたら、手島さんが、ああいいなと言つて使いだした。イスラエルで「マクヤ」と言うのと、手島さんのグループのことを「マクヤ」という。それくらい有名になつてしまった。とにかく、手島さんというのは捨身でやつた人だから大したものだ。

幕屋の構造（三角錐体）は、天幕で真ん中に十字架が立っている。この空間はプニューマ、聖霊の空間。底面の三角形の頂点a、b、cは我々一人ひとり、社会の最小の関係はこの三角関係だ。この三角関係がおかしくならないのは、この縦の線があるからなんです。この直結の線があるから。そうすると、この三角は今度は円錐になる。丸く、円現してしまう。すべての三角形は円の中に入ってしまう。どんな三角形であっても。だから、この縦の関係があると、この三角は三角でなくて円になつてしまう。円現してしまう。我々のこの交わりは円現でなければダメなんです、角があつては。三角でも四角でもダメだよ。天体は全部丸いではないか。四角い天体がどこかにあるかな。

「肉体となりて」

というのはむしろ、

「肉となりて」

と訳した方がいい。「肉」というのは、生まれつきの我々はこの肉なんです、自然的存在は。アダムのあばら骨からエバを造つたというのは物語だ。けれども、本当は人間は一つだったのを男女に分けた。だから、男女が相慕うのは当然だ。恋というのは当然だと。

藤井先生は恋愛否定論だが、何を言っているか。ああいうところは困るよ、あの無教会



というのは。恋愛であろうと、何であろうと全部、愛は神さまから来ているんですよ。この自覚がないから、恋愛否定論なんて出てくるんだよ。自然の感情だから、神さまからきている。恋愛であろうと、親子愛であろうと、兄弟愛であろうと、友情であろうと、全部、神から来ている。その角度からみていたのがゲーテです。

「エロースだ、アガペーだ、フィロースだ」

なんて分けません、彼は。いわゆる神学者はすぐ分けるね。分析する。

「分析ではないぞ、全部、神から来ている」

と。いわゆる善悪の彼岸の世界です。

我々がなぜ「肉」というと、自己中心になっちゃってしまっているから肉なんです。パラダイス・ロストだから肉なんです。けれども、悪くはないんだよ、これ具体的に。本来は、神の姿に即した肉であった。素晴らしい肉であった。具体的な存在だ、アダム、イブは。パラダイスを落ちてから、樂園を喪失してから、いわゆる善悪の世界に入ってから、自己中心の肉になっちゃった。それで、いいのわいのと、何のかんのと、妬んだり争ったりしている。そんな世界は超越しなさいよ。特に男はすぐ争う。女はすぐ妬む。ダメだよな、これは。

●第二のアダムと同じ姿になれ

本当の肉がやってきた。キリストが我々と同じ、笑ったり、泣いたり、食べたり、眠ったり、そういう人になった。ところが、キリストという肉は完全に霊を宿している肉で、霊肉、渾然たる肉です。キリストの肉というのは霊肉、渾然たる肉なんです。この姿でやって来て、みんなに、

「この本当の肉になれ」

と言うことだ、キリストは。

「第二のアダムと同じ姿になれ」

というわけで、お手本を示した。「お手本を示す」と言っても、「イミタチオ・クリステイ」「キリストに倣ならいて」なんて、いくら倣ならったってダメだよ。これは倣ならえない。けれども、いわゆるお手本を示しながらも、

「お手本ではないよ」

とキリストは言っているんです。

「私を受けとるまではダメだよ」

と言っている。けれども、

「私がお前たちの罪を全部十字架で背負って、聖霊がやってくると、この私と同じ肉になるぞ」

と。聖霊を受けとらなければ、我々が本当の、贖われたところの肉になれない。それで



あっても、なお地上にあるかぎりには我々は「罪びと」である。罪びとであると同時に霊的であるという、そういう二律背反的な矛盾的な構造になっている。

これは仕方がないよ、天界にいくまでは。けれども、キリストの霊が、神さまの霊が中心になって動きだしたらば、躓いても転んでも前進せざるをえない。努力ではない。努力精進ではない。上から力が来ているから。そして、祈れば直ちにその世界に入ってしまうから。祈りとはお願いではないですよ。キリストと一つになる呼吸が祈りなんです。

早いよ、僕の祈りは。僕は夜の10時に十二召団のために祈っている。非常に十二召団は私に近い。この召団の特にこの人はと言って、名指して祈っていることもある。しかも、それが15分位で終ってしまふ。10分か15分で。これはもう気合がかかっているからね。電波的ではなくて霊波的な気合がかかっている。10時をちよつとずれたりすることもあるよ。こないだはちよつとずれてしまつて、お風呂の中で祈った。いいよ、お風呂の中でも。あるいは便所で祈るかもしれない。とにかく、どこであろうとも、ただちにそこが神殿である。便所が神殿であるなんて誰も言わない。本当ですよ。

我々の間に幕屋を張つて、キリストは私たちの中に、この幕屋の中に入れてくださった。これはイスラエルの宗教がそれではないですか。「出会いの幕屋」で神さまと一緒に幕屋の中に入れて、それで住む幕屋と一緒に旅をして行つた。あの荒野の、出エジプトの姿が一番本当の宗教的な生活の姿です。ところが、彼らは別な、牛の金の像なんかを造つて、拝んだりしたから、神さまにやつつけられた。偶像なんかを拝むからとんでもないと。神さまの相に即した「即相」でもつて、即相の我々を生かす。だから、イスラエルの神殿には像はありません。モーセの律法だけを置いてある。

律法も儀文になつたからダメ。それを生かしたのがキリストです。モーセの十誡もキリストの山上の垂訓にはかなわない。だから、

「新興宗教だ!」

なんて言われてキリストはやつつけられた。

「冗談じゃない。お前たちを本当に完成しに来たんだぞ。律法の一点一画もいい加減にしているのではないぞ。根本精神を私は表わしているんだ」

と。これは誰もわからない。聖霊が来たらやつとパウロ、ペテロ、ヨハネはわかった。新約聖書はそれでできた。

あのエックハルトは、

「神さまは我々の中で生まれる」

なんていう言い方もしているくらいだ。「キリストが」と言わない。

●つらつら見て手触りし所のもの

ヨハネ第一書簡の第1章1節、これがおもしろい。



「^{はじめ}太初より有りし所のもの、我らが聞きしところ、目にて見し所、つらつら視て手触りし所のもの、即ち^{いのち}生命の言につきて、」(ヨハネ一1:1)

とある。「生命の言」というのはキリストのことですよ。キリストには生命がある。キリストは、

「つらつら視て手触りし所のもの」

という。

「我々は本当に地上の肉なるキリストと一緒にご飯を食べ、一緒に眠りました。これが神の言だ」

と言っているではないですか。そのようにしたのが、この「肉をとった」受肉だということ。具体的に現われる。

「信仰の世界は観念ではなく具体だ」

と言っているでしょ。

久しぶりで会うと、ただお辞儀するだけでなく握手する。あるいは、抱きついたりするでしょ。これはやはり、

「手にて触り、つらつら身体でもって受けとる」

というような世界だ。なにがわるいか。日本人は変てこな遠慮ばかりしている。私がそんなことをすると、誤解されてしまつて、

「小池先生はおかしい」

なんて。何がおかしいか。おかしいと思うやつはおかしいと思えばいい。なにもわざわざすることはないけれども、久しぶりに会ったら自然に抱きついたりするではないですか。

この「肉」というのは、そういうように具体的な存在となつたということです。しかも、このキリストの肉は我々の肉とはちがう。全然、霊的な肉です。霊質を持った肉です。もういきなり天界へ行ける肉なんです。霊化してしまっている。それがキリストの復活体なんです。十字架にかかったつて死にはしない。腐りはしない。霊化してしまうんだ。

大変なひとです。なにしろ水の上を渡ってくるようなひとだから。復活のキリストはお魚なんか食べるひとだからね。あれをみんな神学者なんか笑ったから、私はそのグループから出てしまった。いわゆる普通の概念で「解るの解らないの」なんていう世界ではないんです。

「神さまが解つたら本当の神さまではないぞ」

とエックハルトが言った。

「解るような神さまは神さまではない。神さまは、どうも訳のわからない矛盾して

いるようなものだ」

と。いいよ、何だつて。

それだけの捨身の世界に入ったら、もの凄いことになる。自分がもの凄くなつていくん



だから仕方ない。ありがたいですよ。言葉なんかで説明できない。もう私も生きたって、あとせいぜい20年生きるか生きないかでしよう。あなた方はおおいにやってくださいよ。

「小池先生がいなくなったら集会は解散だ」

なんて、冗談言うな。あなた方は聖霊の召団だからね。

手島（手島郁郎 1910～1973）さんは無教會的なのところがあつたものだから、手島さんが亡くなったら、後に遺された人たちが『生命の光』誌を廃刊にしようかと悩んでいた。そして、私に聞きにやって来た。

「何を言っているか。聖霊の雑誌じゃないか。やめることはない。無教會は、内村先生が亡くなったら『聖書の研究』をやめたけれども、この聖霊に書かしめられている雑誌が、手島さんがなくなつたつてやめることがあるか！」

と私ははつきり言つてやつたら、みんな驚喜喜んで、始めたんですよ。本当ですよ、これは。皆さんも、ケチケチしないで、大いにお互いに助け合いながらやってくださいよ。私が書いたものは無限にあるから、あれをピックアップしていくらでも続けていく。今、手島さんの雑誌はそれをやっているからね、必ず巻頭には手島さんの文章が出ている。よくまとめてあるね、彼らは。ああいうところはなかなか立派だけれども。

キリストはそうにして具体的に我々の間にやって来た。けれども、地上ではその具体性がどんなことであるか分からない。キリストは地上で天国を現じて行つた。目の見えない方の目を開けてしまうし、びつこは立たしてしまうし、癩病は癒してしまうし、癌だつて癒してしまうんだ、キリストは。癌のひともいたと思うけれども。死人まで甦つたではないですか。大変なひとですから、これは。

即ち、黙示録の最後の世界をちゃんと徴をもつて顕している。これが本当の徴なんです。御利益ごりやくではない。神の栄光の現われなんです。

だから、驚嘆驚倒して、私はキリストに圧倒されて生きています。圧倒されている。信じているのではない。こつちで信じているなんていうそんな世界ではない。信ぜしめられ、体受せしめられ、圧倒されて、身体で受けとっている。だから、キリストは、今日、我々の全存在の中に受けとらなければダメです。

それをプロテスタントは「罪、罪」と言うから、

「二つになるという神秘的なのは、それはあぶない」

なんて。何を言っているか。パウロを見てくれ。

「私たちはキリストの中に」

と言っているじゃないか。

「キリストはわがうちに」

と言っているじゃないか。相互、相互関係です。

「神の懷の中にあるキリストだけが神を顕した」



と、この18節に書いてあるじゃないですか。これは素晴らしい言葉だ。

「神の懷にあつたキリストだけが神を顯した、體現した」

とそこにも書いてある。我々はキリストの懷に在つて、夜はキリストの懷に入つて寝てく
ださいよ。どんなことがあつたつて眠れますから。「主さま」と言つて。

私は昨日の晩、古い讃美歌がなんだか懐かしくなつて、昔の讃美歌集を私は小声で歌つ
ていて午前2時半になつてしまった。歌つていて楽しくて。今朝は7時に起きたから4時
間位しか寝ていない。少しキチガイになつてくださいよ、皆さん。あまりキチガイでない
人多すぎる。

「神のためには狂えるなり」

とパウロは言つた。

「キリストのためには狂えるなり」

と。キリスト第一主義で生きなかつたらダメですよ。主義ではないけれども。金があると
かないとか、時間がないとか、そんなことは自由になるから。結局みんな、物において自
分を惜しんでいるんです、本当の無の世界でない。とにかく、事実が証明しますから。こ
だわっていると、結局こだわっているだけの人になつてしまう。キリストは、

「幸いなるかな、靈の貧しき者」

何もありませんと、

天国はその人のものなり」

と言われた。

「精神的にも物質的にも、あるのないのなんて、そんな世界ではないぞ。本当の無
の世界だ。そうしたら無限無量だ」

と。

「世界も我々のものだ」

とパウロが言っているではないですか。キリストを受けとると、全世界は、宇宙は、庭の
ようだと。あのパウロの手紙を見ると、彼は叫んでいるんだよ。叫び、呻いている。
ローマ書8章の終りなんか凄いでしょうが。

そういうわけで、キリストの懷の中に入つて、全存在がキリストの中に座を占めて、キ
リストに圧倒されながら、楽しく楽しく、これが本当に大歡喜の音信おとずれなんです。

「大歡喜の音信をお前たちに」

と牧人たちに言われたでしょ。終ります。

